

## 橋口譲二のベルリン

三浦雅弘

3分間写真を撮ると、他人の顔が出て来る街  
—「ベルリン・天使の詩」(監督：ヴィム・ヴェンダース、1987)

### はじめに

橋口譲二の写真は、ポートレートではなく、人ない人間の写真である。人は誰も、背景や環境をもたずに生きることはできない。その背景・環境は、家族、住まい、学校、仲間、職場、同僚、地域、国……と小さなものから大きなものまでさまざまに可変的である。橋口譲二の人物写真には、この可変的な背景が多様な姿で必ず写しとめられている。

橋口の少なからぬ作品集のうち、写真好きに最も知られているのは、1980年代後半より日本を縦断するように撮影の開始された17歳の少年少女を被写体とするシリーズであろう。その最初の作品集が『17歳の地図』(文藝春秋、1988年)である。17歳を追う旅はその後も継続される一方で、かつて17歳時に被写体であった人々のその後を訪ねた作品集も制作されていて、橋口が倦まず撓まず息の長い仕事をしているのに驚かされる。

橋口がベルリンの街や人を撮り始めたのは、日本の17歳シリーズに先立つ1980年代前半であり、これもまたその後の息の長い仕事ぶりで橋口の真骨頂を示している。本稿は、橋口譲二をかくも引きつけたベルリンの戦後史を検証しつつ、その強烈な磁場の中で橋口が捉えようとした被写体を考察するものである。そこに浮かび上がることが期待される写真家・橋口譲二の主題は、おそらくベルリンという地を越えた普遍性をもつだろう。

### I. ベルリンの特異性

#### 1. 占領下の都市

第二次世界大戦の終結に伴い、ナチス・ドイツの首都ベルリンは、米・英・仏・ソの戦勝連合国によって分割的に統治を受けることになる。米国の占領方式は、連合国最高司令官と占領行政最高責任者をダグラス・マッカーサーという一人の軍人が兼務した日本における直接占領の方式をとらず、占領軍政府が管理するドイツ当局を通じての間接占領という方式が採用されていた<sup>1)</sup>。占領軍政府は当初ベルリンとフランクフルトとにあり、それに起因する混乱も少なくなかった。分割占領下に置かれ中央政府をもてなかった期間のドイツでは、州(ラント)が最高権力機関だった<sup>2)</sup>。戦後間もない当時のドイツ人の思想ないし精神的傾向は、西側では依然として多くの者が反民主主義的であり、東側では共産主義者はごく少数で、そのような傾向が少なくとも1949年の東西二つの共和国設立まで続いていたとフルブルックは述べている<sup>3)</sup>。

1948年6月、戦後のインフレーションに悩んだ西側は、西ベルリンは除外対象と宣言しながら管理区域内で通貨改革を断行しようとする。それを西側の挑発と受け止めたソ連は、西ベルリンに続く全道路を封鎖する。陸の孤島と化した西ベルリンに対して、西側諸国は食料や燃料の空輸・投下を1年間にわたって実施する<sup>4)</sup>。翌1949年の東西ドイツ分裂はその直接の結果とって

よいだろう。1954年10月のパリ協定により、翌1955年5月5日、西ドイツ（ドイツ連邦共和国、BRD）は主権を回復し、同時に再軍備と北大西洋条約機構（NATO）加盟が承認される。それに対抗して東ドイツ（ドイツ民主共和国、DDR）も、同年5月14日、ワルシャワ条約の調印に加わり、東側8か国の軍事同盟が結成される<sup>5)</sup>。

橋口譲二が初めて当時の西ドイツを訪れたのは、それから四半世紀以上のちの1981年12月のことだった。世界の大都市の若者たちを取材する仕事で、パリから陸路でロンドンへ渡り、そこから空路でミュンヘンを経てニュルンベルクで仕事をしたのち、ハンブルクからフランクフルト経由で西ベルリンに降り立っている<sup>6)</sup>。東西冷戦の短からぬ期間、西側の人間は、東ドイツの陸路を踏んで西ベルリンに入ることはできなかった。西ドイツ内の空港から飛び立つ、英国、米国、フランスの指定された航空会社のみが西ベルリンへの乗り入れを許可されていたのである<sup>7)</sup>。

西ベルリンにおける短い最初の滞在の日々を、橋口は「フィクサー」と呼ばれるヘロイン常習者の若者たちの取材に当てた。麻薬から立ち直るための治療施設に勤務していた青年や、東ドイツからの亡命者という過去をもつ麻薬捜査官らの協力を得て、ヘロイン常習者たちの自主的更生施設である「シナノン」を訪問するなどしている。

橋口はミュンヘンには翌1982年の春にも渡航し、その地で、橋口にドイツに対する強烈な関心を抱かせた手記の著者を取材している。クリスチアーネという少女が、「フィクサー」としての自らの過去を綴ったその手記は、当時世界的なベストセラーを記録していた。クリスチアーネの取材後、橋口は彼女が暮らしていた西ベルリンを再度訪れる。こうして一人の日本人写真家による、その後例年の慣行と化して10年を越えたベルリン渡航と取材が始まったわけである。

東ベルリンが歴とした東ドイツの首都であったのに対して、西ベルリンは1990年の東西ドイツ統一直前まで、米・英・仏占領下の都市として国

籍をもたなかった。橋口の観察からも、当時の西ベルリン居住者は自らを西ドイツ人とは認識していなかったことが窺われる<sup>8)</sup>。おおよそ東京23区の面積をもつ西ベルリンは、1980年代前半の人口が約180万、1961年の「壁」構築以後、全長165キロメートルの壁に囲まれて、その外を見張る監視塔は252箇所に及んでいた<sup>9)</sup>。

## 2. 「自由」都市

東ドイツのただ中に壁に圍繞される形で存在していた西ベルリンには、パラドキシカルな「自由」があったという。空路で西ベルリンに降り立っても、パスポートに入国スタンプは押されない<sup>10)</sup>。その都市の「面白さ」を橋口は、「目に見える国境があり、ひとつの空間にさまざまな人がいること」と記している<sup>11)</sup>。

さらに橋口は、東ドイツの中に西ベルリンがあることによって、東と西が目の前で互いの姿を認めながら対峙しているので、むしろ話し合いが断絶しないのではないかと観察している<sup>12)</sup>。壁の位置がそのまま東西の境界線を成しているわけではなかったため、1980年代に入ると、ドイツ民主共和国と西ベルリン市政府との間で区域の交換や売却が進行する<sup>13)</sup>。それは東ドイツの財政難を補うためという意味合いが強かったわけではあるが、橋口の観察を裏づけるものでもあろう。

橋口の取材対象の一角を占めていたのは、「パンク」と呼ばれる若者たちだった。当時の「パンク」は、日本ではサブカルチャーのシンボリックな扱いを受けていたが、ベルリンでは単に「怠け者、役立たず、家なし・職なし」の若者を指していた<sup>14)</sup>。そのパンクたちは、西ドイツでは受け入れられていなかったが、西ベルリンでは受け入れられていたという<sup>15)</sup>。そのようなところに、橋口は異質の人間を拒まない西ベルリンの「健全さ」を見ている<sup>16)</sup>。

しかしそのような西ベルリンの「健全さ」あるいは「自由」は、それと表裏一体の「危うさ」を併せもつものだった。それは橋口によれば、自分

を原点とする確固とした座標軸を見いだせない若者に顕著な「危うさ」である<sup>17)</sup>。「ベルリンには自由がありすぎて自由になるのが難しい。たくさんルールがありすぎて、どのルールを歩いていいかわからない」<sup>18)</sup>。これは1990年の歴史的な東西ドイツ統一の日の前後に橋口がインタビューを行った、当時29歳のマティーネという女性の言葉である。統一前の西ベルリンは、無国籍都市であったがために、最小限の生活物資の生産と消費を除いては、いっさいの経済活動から疎外されていた。そのゆえにその街は、西ドイツや他国・他地域の社会システムから脱落した者たちを引き受ける場所でありえた、と橋口は指摘する<sup>19)</sup>。統一ドイツの首都として生まれ変わったベルリンが、都市としての機能を変質させていくことは理の当然であろう。

島国の日本人にとって、国境 (border) の存在とそれを越える行為というものは、なかなか実感的理解の及ばないものではないか。さらに、戦後1952年以前の日本、1972年以前の沖縄を知らずに日本に生れ育った者にとって、被占領下という事態は想像も困難なものである。1945年から1989年までの西ベルリンは、それらが可視的に体现されていた街だった。1949年鹿児島生まれの橋口譲二は、国境と占領という二つの強烈な磁場に吸い寄せられ、「自由」という主題を追求し続けた写真家だといえるだろう。

## II. ベルリンの「壁」

### 1. 「壁」の構築

東ドイツとソヴィエト連邦によってベルリンに東西を画する壁が構築されたのは1961年8月のことであったが、1949年のドイツ分裂からそのときまで、毎日50万人もの人々が東西を往来していたという<sup>20)</sup>。1953年3月のヨシフ・スターリン死去に続いた同年6月17日の東ベルリン民衆蜂起は50人以上の死者を出してソ連軍により鎮圧され、1956年のハンガリー革命は数千の死

者を出して挫折せしめられていた<sup>21)</sup>。1945年から61年までの間に、自由を求めて東から西に脱出した人々は350万人にものぼり、そのかなりの割合の者が高学歴の若年層であった<sup>22)</sup>。西ドイツ政府は、1949年制定の西ドイツ基本法により、東ドイツからの難民に対して直ちに西ドイツ国籍を与え、社会保障を受ける権利も認めていた<sup>23)</sup>。橋口によれば、「壁」構築直前の1961年2月から8月にかけて、43万人が東ベルリンから西ベルリンに流出したという<sup>24)</sup>。ときの東ドイツ国家評議会議長ヴァルター・ウルブリヒトは、モスクワにソ連最高会議幹部会議長レオニード・ブレジネフを訪ね、「壁」構築の同意を得た<sup>25)</sup>。

国民の大量脱出はいうまでもなく東ドイツを政治的経済的危機に直面させるものであった。スターリンの後を襲ったニキータ・フルシチョフは、1961年の5月から8月にかけて、ソ連の全陸軍兵力の3分の1をベルリンに動員している。ヴォルフムによれば、「遮断」切迫の情報は、西側に当時間違いなく届いていたという<sup>26)</sup>。同年8月12日夜、東ドイツ人民軍がベルリンに集結し、ソ連軍は後方待機の態勢をとった。13日午前1時の消灯を期して、3つのグループによる作業が開始される。警察は鉄道駅を占拠し、うち13の地下鉄駅を閉鎖した。工兵団はレールを切断し、防御柵、鉄条網、枕木を敷設するとともに、街路の舗装を撤去した。民兵たちは作業の見張りに当たっていた<sup>27)</sup>。

最初期は金網の柵と有刺鉄線から成る極めて簡易な「壁」に過ぎなかったものの、ドイツ人が衝撃を受けたことはいうまでもない。ところが、西側諸国の米国・英国・フランスの反応は、むしろ安堵ともいべきものであったという<sup>28)</sup>。そもそも英国首相マクミランは、ドイツの再統一に反対であった<sup>29)</sup>。当時の西側諸国の認識を要約するならば、まず、東ドイツやソ連が「壁」の向う側を欲するのであればそのようなものは構築しないはずであり、「壁」によるドイツ分断の固定化によって「ベルリン危機」は緩和されるはず

だ、というものであった<sup>30)</sup>。西ドイツ、特に当時の西ベルリン市長ヴィリー・ブランドと、米国大統領ジョン・F. ケネディとの信頼関係は地に落ちようとしたが、しかしヴォルフムルの分析によるならば、ケネディの無為無策がソ連と西側諸国との衝突を回避させたとも考えられる<sup>31)</sup>。たとえ「壁」を破壊しても、東側が境界線から数メートル下げてそれを再建することは止められないわけでもあった。「壁」構築2か月後の、1961年10月27日から28日にかけて、フリードリヒ街のチェックポイント・チャーリーにおいて、北大西洋条約機構軍とワルシャワ条約機構軍が16時間対峙するという「事件」はあったものの、「壁」はベルリンあるいはドイツ分断の問題をある意味で沈静化して行くかのような効力を持ち始める<sup>32)</sup>。その効力に伴う副作用の犠牲となったのはいうまでもなく東ドイツ国民であり、間もなく東ドイツはフィンランドと並んで自殺率の高い国家となって行く<sup>33)</sup>。翌1962年8月、壁は東ドイツ政府により「反ファシズム防壁」と命名された<sup>34)</sup>。

## 2. 構築以後20年余り

「壁」構築から10年余りのちの1972年12月、国際法的な相互承認ではないとはいえ、東ドイツと西ドイツの間に基本条約が結ばれた。この条約の締結とともに、「一つのドイツ」というスローガンは消失し、東ドイツは「二国家二国民」、西ドイツは「二国家一国民」を基調とすることになる<sup>35)</sup>。翌1973年、東ドイツは国際連合に加盟し、1975年には全欧州安全保障協力会議の最終文書において国家として承認される<sup>36)</sup>。「壁」は1974年より、鉄筋コンクリート製の第三世代に生まれ変わり始め、そのための資材は、優に一つの小都市が建設可能な量といわれた<sup>37)</sup>。西側からは、抑圧の醜状を示す「共産主義の恥辱」のシンボルと見なされていた壁は、東側では平和を維持しようとするプライドのシンボルとされたのである<sup>38)</sup>。しかしその陰で、東ドイツは1970年代末より、経済の不振、環境汚染の悪化、高齢化した

指導層の能力低下等によって深刻な停滞に陥って行く<sup>39)</sup>。

「壁」の構築から20年を経たのちに、橋口譲二のベルリン滞在および取材が開始されたことになる。1984年の橋口にとって、壁は平穏な日常生活を保つものと感じられ、それがなくなるときは、欧州の平和バランスが崩れるときではないかと想像されていた<sup>40)</sup>。その1984年に、壁を乗り越えて脱出した者は30名、脱出に失敗した者は8名であったという<sup>41)</sup>。残されている数字からすれば、過去と比べて状況が「落ち着いて」いたとはいえるかもしれない。その前年、橋口の4度目のベルリン訪問のときには、西ベルリンの若者たちに、空き家占拠というムーヴメントが流行り、アメリカ化、他者とのコミュニケーション、写真を撮られること等々に対する拒否という姿勢が目立っていた<sup>42)</sup>。空き家占拠は、既存の価値観や生き方・社会システムの改革を目指そうとするオルターナティブ運動のひとつの表現として、「スクウォッター」と呼ばれた若者たちにより、1970年代後半から英国・オランダ・イタリア等で始まり、1980年代に西ベルリンに入ってきた<sup>43)</sup>。「スクウォッター」たちには、たとえ同じ空間や行動を共にしていても相互不信が感じられ、ビールやハッシュシや音楽や示威行動や性行為などは、脆い人間関係を何とか維持しようとするための儀式に思われたと橋口は述べている<sup>44)</sup>。

## 3. 「壁」の開放前後

1979年のソ連によるアフガニスタン侵攻を契機として第二次東西冷戦が開始されたものの、ヴォルフムルによれば両独は二つの超大国からの自立を目指し、1980年代にはむしろ関係の改善が進んだ<sup>45)</sup>。両独の間に1986年には、最初の友好都市協定と文化交流協定が結ばれているが、協調のピークは1987年の東ドイツ国家評議会議長、エーリッヒ・ホーネッカーのボン訪問であった。ソ連では1985年にミハイル・ゴルバチョフが共産党書記長に就任し、事実上の経済改革に当たる

「ペレストロイカ」と、政治および社会の透明性の増大を意図した「グラスノスチ」とを推し進めていた。

両独関係に変化が萌してはいたが、数年後の「壁」の崩壊、そしてその翌年の東ドイツの崩壊を導いたのは決して西ドイツの政策ではなく、ソ連と東欧の変化であった<sup>46)</sup>。ゴルバチョフの登場した翌年にはチェルノブイリ原子力発電所の事故があり、1988年からソ連軍はアフガニスタン撤退の開始を余儀なくされている。米国では1989年に大統領がロナルド・レーガンからジョージ・H. W. ブッシュへと交代した。

この頃の「壁」をめぐるエピソードには次のようなものがあった。「壁」はおおむね本来の東西境界線より数メートル東側にあったため、開放前の1986年には数人の「壁アーティスト」が東側の国境警備兵に連行され、禁固20か月の判決を受けるという事件も発生している<sup>47)</sup>。1988年7月には、国境の「飛び地」のひとつである「レネー三角地」を「アウトノーム」たちが占拠して、壁を東側へ乗り越えるというパフォーマンスが演じられたりもした<sup>48)</sup>。橋口によれば、多くは労働者階級の出身で完全に社会システムの外にドロップ・アウトしている「パンク」に対して、「アウトノーム」の多くは家や大学などの社会的システムとの関係を維持しながら過激な主張を唱える者たちで、一見「左翼」風でありながら内実はファシスト的な体質をもつ者たちのように感じられたという<sup>49)</sup>。

1989年6月にハンガリーが、同年7月にポーランドが、ソ連からの「自主・独立路線」を宣言する。それに伴って東ドイツ国民に、ハンガリー経由での西ドイツ入国希望者が激増した。同年9月11日、ハンガリーは単独決定によりオーストリアとの西部国境を開放する<sup>50)</sup>。西部国境からウィーンを経て西ドイツ領に入るまでの約7時間を要する輸送に当たっては、輸送体制は三国の協力下で整えられたが、輸送費用は西ドイツが負担していた<sup>51)</sup>。このルートによる越境総数は、9月

11日から翌1990年1月までに34万人に達した。

ハンガリーの西部国境開放からひと月足らずの1989年10月7日、ベルリンでの東ドイツ建国40周年記念式典において、来賓のゴルバチョフはホーネッカー政権不支持のシグナルを送ったとされる。ゴルバチョフは東西冷戦を終わらせる条件として東ドイツの西側への譲渡を決断し、11月9日、ホーネッカーの後を襲ったエーゴン・クレンツによって「ベルリンの壁」が開放されるに至る<sup>52)</sup>。

ベルリンの壁が崩壊したとき、橋口譲二はロンドンに滞在していた<sup>53)</sup>。ハンガリー国境開放以後の事態の進展を予想していた者は無きに等しく、東ドイツ人すら壁がまたすぐに戻されることを恐れていたという<sup>54)</sup>。かねて壁の向こう側を自由に歩いてみたいと考えていた橋口は、一時帰国して東ドイツ大使館にヴィザを申請する。橋口の見た壁開放直後の東ベルリンでは、乗り合いバスの老朽化やその排気ガスの劣悪さはすさまじく<sup>55)</sup>、ホテルや公衆電話からの西ベルリンへの通話はあいかかわらず困難だった<sup>56)</sup>。

壁の開放に先立つ1989年4月、東ドイツでは国境における発砲命令が撤廃された<sup>57)</sup>。それによって、1989年2月に射殺された青年が、壁越えの逃亡未遂の最後の犠牲者となった。壁の構築以後、5000人にもものぼる者が壁を乗り越えたが、乗り越えようとして阻まれた犠牲者は約200名を数えた<sup>58)</sup>。壁の乗り越えも含めて、東ドイツから西側へ逃亡しようとして殺害された者は1200名を越えたという<sup>59)</sup>。ヴォルフムンによれば、壁が崩壊するまでに東ドイツから西側へ逃亡した者の逃亡理由は、時期により明瞭に分かれた。壁建設前は、政治的理由を挙げた者が全体の56%、経済的理由が10%であるのに対して、1980年代には、言論の自由の欠如を挙げた者が全体の71%、政治的圧迫が66%、旅行の自由の制限が56%、生活苦が46%、未来の展望の欠如が45%、親類の関係が36%であったという<sup>60)</sup>。自由を求める声の増大と、東ドイツの経済的逼迫が明らか

に見てとれよう。

1989年12月2日のマルタ・サミット会議におけるブッシューゴルバチョフ会談によって東西冷戦の休戦が合意される<sup>61)</sup>。1990年7月にゴルバチョフは東西ドイツの統一（ドイツ再統一）、および再統一後のドイツのNATO加盟を承認する<sup>62)</sup>。それと引き換えに、西ドイツ首相ヘルムート・コールはソ連への経済的技術的支援に同意した。再統一に先んじて通貨が統一され、それまで1西独マルクに対して2.7東独マルクであった実勢レートが1対1となり、東側の製品があつという間に市場から姿を消して行く様子を橋口は目撃している<sup>63)</sup>。東西の統一は、東側からすれば西側による吸収合併にはかならず、西側からすれば東側の復興援助のために莫大な負担を背負うことを意味していた。再統一直前のベルリン人は、東西を問わず屈折し、動揺していた<sup>64)</sup>。東ベルリン住民の西ベルリンへの異動により、西の若者が東にできた空き家を占拠する<sup>65)</sup>といった出来事と同時に、西の労働者階級のファシスト少年と、長年西ドイツが積極的に受け入れていたトルコ人労働者との対立が顕著化していた<sup>66)</sup>。すでにこの頃から、東の人々は西の人々に対して、生活レベルの格差に起因するある種の卑屈さを示していて、やがて言われるようになる「心の壁」を築き始めていた<sup>67)</sup>。記念すべき1990年10月3日のドイツ再統一の日に橋口の眼に映じたのは、むしろ戸惑っているかのような東ベルリンの人々の姿だった<sup>68)</sup>。

橋口の観察によれば、当時の西ベルリン人の率直な反応は、壁開放は歓迎したものの、その後流入して来た「灰色の」東ベルリン人には幻滅を感じたというものだった<sup>69)</sup>。西ベルリン人はむしろ攻撃的になったように見えたという。再統一後の旧東ドイツ国民には、「二等国民」の劣等感が生まれていた<sup>70)</sup>。再統一後より、西の者は旧東の者を「オシス」という蔑称で呼び、逆の方向には「ヴェシス」という言葉が使われるようになった<sup>71)</sup>。

1992年9月2日、2年前にはドイツ再統一の立

役者としてノーベル平和賞候補にも擬せられた首相のコール自らが、東西ドイツ統一の失敗をアナウンスする<sup>72)</sup>。旧東ドイツ域内ではその2年の間に、旧国営企業の倒産や失業・離婚・自殺の件数が増加の一途を辿っていた。精神病罹患者が急増し、少数民族への暴力事件も日常化して、その一方で出生率は半減した<sup>73)</sup>。再統一に先行した通貨統合の失敗の結果として、1993年のドイツは、成長率が戦後最悪の前年比マイナス1.7%を記録した<sup>74)</sup>。失業者総数は、1994年1月には400万人を越えている。失業者にはドイツ人のほか、トルコ人をはじめとする移民や難民も含まれるが、1992年8月の時点でドイツの難民総数は前年の2倍に当たる27万人を数えていた。排他的な視線を向けられて襲撃された難民犠牲者は20人にのぼった。同年11月8日には、ベルリンで行われた外国人排斥・人種差別反対デモに30万人が参加している。数字の上ではベルリン人の1割が参加したことになるその事実、橋口はかえって恐怖を覚えたという<sup>75)</sup>。橋口の恐怖感はずいぶんドイツ人の「熱しやすさ」に起因するのであろうが、そのデモの際に起きた小事件にも不気味さを感じずにはいられなかった。参加者の一人であった当時のドイツ大統領、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーに生卵が投げつけられたのであるが、乱暴を働いたのは「ネオナチ」ではなく、一般に「左翼」と目される「アウトノーム」だったのである<sup>76)</sup>。1993年から翌年にかけての調査によると、旧東ドイツ市民の回帰意識が顕著に嵩じている<sup>77)</sup>。彼らの旧東ドイツ時代に対する懐旧の心情は「オスタルギー」と呼ばれたが、他方で旧来の西ドイツ市民にはかつての西ドイツに対する愛国主義が高まったという。ドイツ人の中の「心の壁」はもはや明らかであった。

東西ドイツ統一の数か月後に、橋口はライプツィヒにあるカール・マルクス大学の講師をしている1945年生れの男性を訪ねている。そのインタビューの限りでは、被取材者は再統一で悪くなったこととして物価の高騰しか挙げていないよ

うだ。良くなったこととしては、言論の自由、移動（旅行）の自由、消費物資が豊富になったことの三点を挙げている<sup>78)</sup>。旧東ドイツの諸困難が沈静化し始めたのは1990年代半ばを過ぎた頃からであり、それからさらに歳月が流れて、今日のドイツはユーロ圏最大の経済規模を有する国となっている。

### Ⅲ. 橋口譲二の視線

#### 1. 写しとめられた「記録」

ベルリンという特異な都市に優に10年以上通い続けて定点観測を行ってきた日本人写真家は、おそらく橋口譲二のほかにはいないだろう<sup>79)</sup>。戦後の都市化した現代社会の映像で名高い外国人写真家といえば、誰しも1950年代の米国を撮影したスイス人写真家のロバート・フランク（1924-）や、皮切りは自国のニューヨークであったものの、その後ローマやモスクワや東京やパリを矢継ぎ早に撮影して世界を睽目させた米国人写真家のウィリアム・クライン（1926-）を思い浮かべよう。しかし橋口の撮影スタイルが、「アメリカン・ドリーム」が謳われていた当時の米国を異邦人の醒めた眼で見つめたフランクや、世界のどの大都市にあっても無差別に荒々しく情景を切りとったクラインとは全く異なっていることは一目瞭然である。フランクの代表作、『アメリカ人』のジャケット・カバーにも使われている有名なトローリーバスのショットでは、見る者の視線はまず中央の今にも泣き出しそうな白人の幼女に向かうが、瞬時にしてその後ろの虚ろな目をした黒人男性に移り、その席から後ろが黒人席に指定されていることを知る。見る者の眼底に残される印象は、一瞬でポジティブなそれからネガティブなそれへと反転せずにはいない。橋口の視線はフランクと対照的に、一見ネガティブなシーンにポジティブな意味を見出そうとするとそこにその特徴があるように思われる。1981年末の西ベルリン初訪問時の作品が収められた『俺たち、どこに

もいられない』には救いのない情景が続くが、それから「壁」がなくなるまでのベルリンを、そこに佇む若者たちを軸に描き出そうとした比較的小ぶりな写真集『自由』（角川書店、1998年）には、その特徴的な視線が痛いまでに感じられ、見る者の情感は強く揺さぶられずにはいない。その作品集の中で、「パンク」たちは屈託のない表情を浮かべ、また、彼らの暮らす部屋の窓辺には、櫛や鋏やシェーヴィング用品が整然と置かれていたりする。

橋口の写真作品集のうち、『俺たち、どこにもいられない』と『動物園』（情報センター出版局、1989年）とはベルリンが唯一の主題とされているわけではない。1986年から翌年にかけて世界14都市の動物園を回り、そこにやって来る人々を捉えた『動物園』の取材のとき、橋口はベルリンの戦争未亡人の存在を身近に知ることになったという。

『DIE MAUER』（情報センター出版局、1991年）は、ドイツ語の表題通り、1981年から1991年までの10年以上にわたって「ベルリンの壁」を撮り続けた貴重な記録である。フィルムはコダクロームであろうか、重厚で繊細な発色が、人間の生み出した奇怪な歴史の産物を顧みる者の眼を、ともすれば伏し目がちにするような力を添えている。

『BERLIN』（太田出版、1992年）および『Hof—ベルリンの記憶』（岩波書店、2011年）という二つの大判の写真集は、その作品の多くが1990年の暮れにベルリンの中古カメラ店で買ったというローライフレックスで撮影されており、モノクロームの気品に満ちた存在感をまとっている。前者は1990年12月から翌年2月にかけて、主に旧東ベルリンのプレントラウアー・ベルグと呼ばれる地区の人々と情景を集中的に撮影した作品集であり、後者はその同じ地区内と、もうひとつミッテ地区内に、古い集合住宅に囲まれるようにしてひっそりと息づくように存在していたHof（中庭）の佇まいを、1990年から2010年までの長期

にわたって記録し続けた作品集である。

そのすべてがベルリンの作品であれ、一部のみベルリンを扱った作品であれ、『自由』以外の橋口の写真集は、一応「記録」の要素が強いものといえてよい。しかしその一方で、写真というメディアの性格を考えると、いかに「記録」的な作品であるといっても、それは無数にある現実の光景の中から写真家はその固有の視点をもって切り出したショットである以上、「表現」の要素を捨象することは不可能なことも明らかであろう。写真家であると同時に作家である橋口譲二の写真群に、「表現」の要素を見ないことは別して困難に思われる。フルブルックによれば、1990年以降のドイツの歴史家たちには、歴史を人々の経験や出来事の継起から構成される物語として叙述しようとする傾向が認められるという<sup>80)</sup>。「物語としての叙述」からその構成者の主観を捨象することが不可能であるのと全く同じ事情が、橋口の「記録」写真にもそのまま当て嵌まるだろう。一瞬を写しとめたはずの写真作品に、幾星霜を経て沈殿して行くかのように織り成された静かな物語の囁きが聴こえないだろうか。

## 2. 『自由』という作品集

橋口譲二がベルリンにおいてレンズを通して捉えようとした人間像には、「パンク」、ヘロイン常習者としての「フィクサー」、東ドイツからの脱出者、トルコ人移民などがあった。彼らこそ写真集『自由』の主人公たちであり、その一巻を開いて行くと、時々被写体の漏らした眩きような言葉が現れる。「新しい生活が始まったの。新しい仕事に、新しい家。それに新しい彼」。この言葉は、『ベルリン物語』に登場するアンネッテと呼ばれる若い女性フィクサーが発したものである。写真集には、その言葉のあとに、黒い服を着た長髪の女性のショットが4頁続くが、彼女がアンネッテであるかどうかは分からない。アンネッテの「新しい彼」は、橋口が親しくしていた麻薬担当刑事のルーカスだった。1943年生れのルーカ

スは、17歳のときに家族を残して東ドイツを逃れ、西ドイツに亡命していた。離婚も経験していたが、優秀な捜査官としてフィクサーたちの更生に尽力していたようだ。しかし、彼もアンネッテを救うことはついにできず、彼女は短い一生を終えてしまう。写真集と著作とを合わせて繙く者は、この被写体とアンネッテとを重ね合わせて見ることになるだろう。

1981年の、世界各国の大都市の若者を取材した仕事の経験から、橋口はドイツのヘロイン常習者が米国のそれとは来歴が異なることを看取している。米国のフィクサーたちはその多くが貧困層の出身であったのに対し、ドイツは富裕層から中間層出身の者が多かったというのである<sup>81)</sup>。ドイツのこの現象を、橋口はある意味でヨーロッパ社会史の現代におけるひとつの帰着点を示すものではないかと考察している。長きにわたる歴史と、成熟した伝統的文化は、深く根を下ろした確固たるシステムをドイツに構築していた。そのようなシステムから何らかの理由で一度排除された者は、復帰が困難になるのではないかというのである。ドイツの学校制度は確固としたシステムの一例であろう。子どもたちは11歳で基幹学校（ハウプトシューレ）、実科学校（リアルシューレ）、ギムナジウムのうちのいずれかへの進学を迫られる。大学にはギムナジウム以外からはほぼ進学できないわけであるが、この制度が社会的階層の固定化を後押ししていることは疑えないだろう<sup>82)</sup>。ドイツの社会システムがもう少し緩ければ、「パンク」や「フィクサー」はかくも多くならなかったかもしれないと橋口はいう。

橋口によれば、ドイツは自由主義と個人主義が尖鋭的に突出した国である。例えば、奨学金制度の充実もあって大学生の年齢は実にまちまちである。いわゆる「モラトリアム」が果てしなく許容されているかのようなベルリンの学生を見ていると、家庭の束縛や「世間体」という評価基準によって絶えず他者から決断を迫られている、モラトリアムの幅の狭い不自由な日本が見えてくると

いう<sup>83)</sup>。ドイツにあっては、日本人には想像も難しいような自由が個人の間——家族間においてすら——保証され、その自由な行為の帰結は、いかなるものであれ当人が責任を負わねばならない。過酷なまでの自己責任の重荷に屈し、ついには精神を病む若者も少なくないのではないかと<sup>84)</sup>。ドイツ人が一般に、パンクやアウトノームやネオナチまでも含めて、自らとは異質の思想に対して頑固なまでに徹底的に批判し否定しようとする傾向をもつことが、この問題をさらにこじらせているのではないかと橋口は観察している<sup>85)</sup>。

「道行く人を見たり、外で鳥を見たりできるのがとても幸せなの。他人にとっては何もしていないように見えるかもしれないけど、私にとってはとても大切なことなの。この気持ちは、一度もどこかに閉じ込められたり、自由を願ったことのない人にはわからないかもしれない」。『自由』の比較的終わりのほうにあるこの言葉は、1957年生れのスザンネという女性が発したものである。写真集ではそこから5頁ほど、カフェやバーで憩う人々のポートレイトやスナップが続いている。東ベルリンで歯科技工士として働いていたスザンネは、1982年に恋人と西ベルリンに逃れようとしているところを国境で逮捕され、1年余りの服役の後、西ベルリンに「釈放」されるという過去をもっていた<sup>86)</sup>。その後の西ベルリンでの暮らしも決して順風満帆でなかったにもかかわらず、「生活や経験に後悔はない」というスザンネは、橋口のインタビューに対して、「東ドイツは強制された共同社会だった。西の人にとって当たり前の＜自由＞は、東の者には全く特別に聞こえる」と答えている<sup>87)</sup>。「壁」の崩壊以前に東から西に時には命がけで亡命して来た人々の内心には、開放の当時複雑なものが去来していたことを橋口は記録に留めている<sup>88)</sup>。カフェやバーで寛ぐ人々の表情に、開放以前の亡命者の微妙な心の揺らぎを見るような気がするのはい過ぎだろうか。

### 3. 写真家にとっての友愛

人物写真家・橋口譲二にとって、人間の「自由」という主題は限りなく重い。個人の内面的自由の希求が頂点に達した外面への現われが、1989年のベルリンの壁崩壊であった。自由の希求は個人のそれに始まって、国家をめぐる自由、経済における自由へと拡大して行く<sup>89)</sup>。個人の自由には、言論・移動・職業選択等の自由が含まれるが、すべての自由の大前提となるのが言論の自由であることは、ヴァイツゼッカーの指摘するとおりであろう。言論の自由が保障されてこそ、社会の中の人間の現実が率直に語られ、そこから人間相互があるがままに認められる道が拓かれるとヴァイツゼッカーはいう<sup>90)</sup>。

人間相互の認め合いは、他者の「健全な」利己主義を正当なものとして相互に認知し合うことに始まるが、それはまた市場原理の目指すところでもある<sup>91)</sup>。実はこのことが、写真家・橋口譲二のもう一つの主題に関係するのではないだろうか。「写真家というあり方にとっての友愛の可能性」という主題は、ある意味で「自由」という主題に勝るまでに橋口に切実なものに見える。

職業写真家である以上、撮影行為が好きでなければ務まらないはずではあるが、橋口の文章に撮影時の高揚感などが記されているものはあまりない。多くの場合はライカ1台に2本のレンズしか携行せず、ベルリンでのローライフレックスの購入記などはむしろ珍しく橋口が機材について語っているくだけたであろう。冬に渡独することの多い理由のひとつに、菩提樹やマロニエの葉が落ちていたので街の形が見えて面白いということがあったようだが<sup>92)</sup>、橋口の本領たる人物写真撮影においてはいわば撮影の質が異なっていて、おそらく街の撮影のように肩の力の抜けたものではないだろう。

人を被写体とする写真撮影では、いうまでもなく写真家が能動で被写体が受動である。街の撮影などでは、あるときまで目に留まらなかったもの、見えていなかったことが、ふとしたはずみに目に

留まるようになり、見えるようになって、初めてシャッターを切ることができる、と橋口はいう<sup>93)</sup>。特定の個人を撮るときも原則は同様であろうが、カメラを手にした瞬間に、写真家は被写体と同じ地平には立てなくなってしまうことを橋口は苦しんでいるようだ<sup>94)</sup>。事実、1990年に取材・撮影したマティーネからは、橋口の作品の残酷さのようなことを口にされてもいる<sup>95)</sup>。

いかに親しい友人でも、シャッターを切る瞬間の橋口の眼差しはいわば客観的で、一步距離を置いて被写体を見つめていることを、橋口は繰り返し明言している<sup>96)</sup>。一度は撮影を許しても、マティーネのような思いからか、後日再度の撮影が許されなかったこともあるようだ。それはすなわち、写真に撮ってその作品を記録／表現として発表しようとする行為が、被写体にとっては、橋口の「健全な」利己主義として認められないことを意味していよう。橋口と似た悩みを抱く、人を主な被写体とする写真家は少なくないはずだ。しかし写真家によって書かれたものを読むかぎり、橋口ほどにその憂鬱を語って「写真家」という職業を呪っているかのような同業者はあまりいないように見える<sup>97)</sup>。

友愛はおそらくほとんどすべての人間にとって切実なものであり、橋口譲二もその例外ではないというのが実情であろう。これまで内外を問わず夥しい老若男女の人物写真を撮影してきた橋口が、その被写体となった人々と驚くほど高い割合で通信を続けていると聞いたことがある。

一方で、写真撮影には往々にしてある種の中毒性・嗜癖性のようなものが伴うことがあり、そのようなものから免れない写真家も少なくないのではないか。写真撮影の中毒性・嗜癖性は、作品として写真家に所蔵される一瞬のイメージの収集可能性に結びついている。おそらく友愛は、収集や所有といった概念から遠く離れたところに成立するものであり、そのことが撮影行為と矛盾しかねない地点に対して、橋口は鋭敏に反応しているのではないだろうか。

## おわりに

2014年は「ベルリンの壁」崩壊から四半世紀が過ぎたドイツにとって節目の年であった。首相は2005年より東ドイツ出身のアンゲラ・メルケル(1954-)が務めている。日本の主要全国紙は壁崩壊25周年に因む記事を載せているが、朝日新聞は10月30日、31日に「統一ドイツは今」というレポートを連載している。それによると、この25年間に旧東ドイツ区域に対して道路や公共施設の整備のために投ぜられた資金は約274兆円にもものぼる一方で、旧東側区域の人々の平均所得は、旧西側区域の人々の約8割にとどまっているという。人口も、旧西ドイツが400万人以上増加しているのに対して、旧東ドイツは264万人減少している<sup>98)</sup>。

壁崩壊の早くも翌年から囁かれていた「心の壁」については、ドイツ紙の最新調査で、旧西ドイツ人の74%は「民主主義が最善の制度」と答えたそうだが、旧東ドイツ人の同じ答えは40%にとどまったという<sup>99)</sup>。「心の壁」が完全消滅したとはいえないのかもしれない。

今日のベルリンをめぐる報道事実からも、橋口譲二の一連の作品群がなおも見つめられねばならないことは明らかであろう。いや、人間が自由と友愛を希求してやまない存在であるかぎり、それはベルリンの歴史的事実を越えて求められることなのだ<sup>100)</sup>。

## 註

- 1) 安野正明、「アメリカのドイツ占領」、油井大三郎・中村政則・豊下楯彦編、『占領改革の国際比較—日本・アジア・ヨーロッパ—』、三省堂、1994年、223頁。
- 2) 木戸衛一、「ソ連占領下ドイツにおける政治構造」、同上、252頁。
- 3) メアリー・フルブルック(芝健介訳)、『二つのドイツ1945-1990』、岩波書店、2009年、23頁。
- 4) エドガー・ヴォルフム(飯田収治・木村明夫・

- 村上亮訳)、『ベルリンの壁』、洛北出版、2012年、47頁。山本武信、『世界を揺るがした10年—ベルリンの壁崩壊から9.11まで—』、晃洋書房、2005年、14頁。
- 5) フルブルック、前掲書、28頁。
  - 6) 橋口譲二、『俺たち、どこにもいられない』、草思社、1982年、100頁。
  - 7) 橋口譲二、『ベルリン物語』、情報センター出版局、1985年、147頁。
  - 8) 同上、23頁。
  - 9) 同上、44頁。
  - 10) 同上、148頁。
  - 11) 同上、190頁。
  - 12) 同上、292頁。
  - 13) ヴォルフム、前掲書、168頁。
  - 14) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、情報センター出版局、1993年、252頁。
  - 15) 橋口譲二、『ベルリン物語』、71頁。
  - 16) 同上、102頁以下。
  - 17) 同上、108頁。
  - 18) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、12頁。
  - 19) 同上、253頁。
  - 20) ヴォルフム、前掲書、26頁。
  - 21) 同上、40頁以下。
  - 22) 同上、59頁。
  - 23) 橋口譲二、『ベルリン物語』、249頁。
  - 24) 同上、130頁。
  - 25) 笹本駿二、『ベルリンの壁崩れる—移りゆくヨーロッパ—』、岩波新書、1990年、56頁以下。
  - 26) ヴォルフム、前掲書、78頁以下。
  - 27) 同上、22頁。
  - 28) 同上、16頁、66頁。
  - 29) 同上、68頁。
  - 30) 同上、71頁。
  - 31) 同上、79頁。
  - 32) 同上、83頁以下。
  - 33) 同上、86頁以下。
  - 34) 同上、125頁。
  - 35) 同上、147頁以下。
  - 36) 同上、150頁。
  - 37) 同上、34頁。
  - 38) 同上、141頁。
  - 39) フルブルック、前掲書、108頁。
  - 40) 橋口譲二、『ベルリン物語』、193頁。
  - 41) 同上、221頁。
  - 42) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、情報センター出版局、1993年、110頁。
  - 43) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、241頁。
  - 44) 同上、96頁。
  - 45) ヴォルフム、前掲書、163頁以下。また、フルブルック、前掲書、33頁。
  - 46) フルブルック、前掲書、115頁。
  - 47) ヴォルフム、前掲書、176頁。
  - 48) 同上、169頁。
  - 49) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、196頁以下。
  - 50) 笹本駿二、前掲書、8頁以下。
  - 51) 同上、87頁。
  - 52) フルブルック、前掲書、117頁以下。
  - 53) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、21頁。
  - 54) 同上、46頁。
  - 55) 同上、61頁。
  - 56) 同上、144頁。
  - 57) ヴォルフム、前掲書、119頁以下。
  - 58) 同上、104頁。山本武信、『世界を揺るがした10年—ベルリンの壁崩壊から9.11まで—』、晃洋書房、2005年、15頁。
  - 59) ヴォルフム、前掲書、37頁。
  - 60) 同上、104頁以下。
  - 61) 笹本駿二、前掲書、59頁。
  - 62) 山上正太郎、『「冷戦」—国際政治の現実—』、文元社、2005年、220頁。
  - 63) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、187頁。
  - 64) 同上、250頁。
  - 65) 同上、132頁。
  - 66) 同上、149頁。
  - 67) 同上、177頁。
  - 68) 同上、213頁。
  - 69) 同上、137頁。

- 70) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、85頁。
- 71) フルブルック、前掲書、37頁。
- 72) 山本武信、前掲書、31頁以下。
- 73) フルブルック、前掲書、123頁。
- 74) 山本武信、前掲書、39頁。
- 75) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、303頁以下。
- 76) 同上、306頁以下。
- 77) 山本武信、前掲書、48頁。ヴォルフム、前掲書、235頁以下。
- 78) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、137頁。
- 79) 他の日本人写真家では、やや撮影の間隔が空いている時期があるものの、土田ヒロミ（1939-）の定点撮影による作品群が知られている。
- 80) フルブルック、前掲書、18頁。
- 81) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、264頁。
- 82) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、249頁以下。
- 83) 同上、27頁。
- 84) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、266頁。
- 85) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、238頁。
- 86) 橋口譲二、『ベルリン物語』、240頁。
- 87) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、115頁以下。
- 88) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、88頁。
- 89) カール・フォン・ヴァイツゼッカー（小杉尅次・新垣誠正訳）、『自由の条件とは何か 1989～1990—ベルリンの壁崩壊からドイツ再統一へ』、ミネルヴァ書房、2012年、200頁以下。
- 90) 同上、208頁。
- 91) 同上、206頁。
- 92) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、248頁。橋口の私信によれば、厳しい寒さと戦わねばならないベルリンの冬では、人々が装うことを忘れて自らの内面を表に出しやすいことがさらに大きな理由であるという。
- 93) 同上、80頁。
- 94) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（上）』、302頁。
- 95) 橋口譲二、『新・ベルリン物語（下）』、37頁。
- 96) 同上。また同書、284頁。
- 97) 同上、294頁。
- 98) 朝日新聞、2014年10月30日付、玉川透による記事。
- 99) 朝日新聞、2014年10月31日付、玉川透による記事。
- 100) お忙しい中、草稿にお目通しいただき、貴重なご指摘を賜った橋口譲二さんに感謝申し上げます。